

六甲山自然案内人の会 平成23年8月定例観察会報告書

実施日：平成23年8月6日（土）

コース：神鉄・大池駅～天下辻～鰻の手池～谷上駅

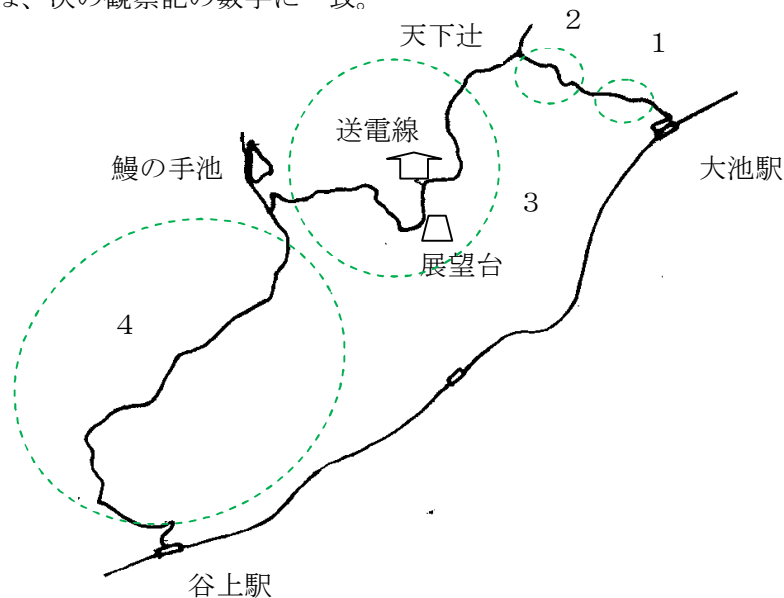
テーマ：真夏の裏六甲の植生を見る（3班担当）

参加人員：ビジター11名、会員17名、合計28名

当日の配付資料：コース地図、植生リスト

【当日のコース】

地図の数字は、次の観察記の数字に一致。



【観察記】

1. 大池駅から橋まで（特に進行方向左手山の斜面を中心に）

大池周辺は加古川水系と武庫川水系の分水嶺。ここから有馬側の川は武庫川に、谷上側の川は加古川に合流する。駅前の信号機付近に立つと、左右に走る有馬街道がそれぞれ下り坂になっているのがわかる。この付近は古々山峠（標高345m）とも呼ばれている。

信号を渡り、坂を上って左折すると大池聖天興隆寺。昭和15年に生駒聖天を勧請した寺で七福神の福祿寿と弁財天を祀っていると、ネットに書いてあった。

ここを通り過ぎると左手に山の斜面（2か所）。まずここで多くの植物を観察した。木本植物では、アカメガシワ（葉に蜜腺、葉柄の長さいろいろ）、ヒメコウゾ（葉身と葉柄の境に小さな爪のような毛が特徴）、クサギ（白い花）、サルトリイバラ（丸い実）、花の時期は終わったが、ウグイスカグラ、ウリカエデ、ウリハダカエデ、コアジサイ（実は水瓶の形、

中に細かい種子)、コガクウツギ、コツクバネウツギ、シラキ、テイカカズラなど。シダ植物では、ワラビ、ゼンマイ、シシガシラ。草本植物では、カナムグラ（ホップの親戚）、ダイコンソウ（黄色の花）、ツユクサ（青色の花びら）、アリマウマノスズクサ（ミッキーマウス状の葉）、カラスビシャク（サトイモ科の花）、コアカソ（左右で異なる葉柄の長さ）、ナガイモ（ヤマノイモより葉が厚く、基部が左右に張り出す）など。

橋を渡り小川越しに、アワブキ（葉の側脈が並行）など、川床にはヤブカンゾウ（八重のオレンジ色の花）、石垣にはペラペラヨメナ（白い花）。

2. 橋から天下辻まで

橋を渡って左手、キカラスウリ（花びら外縁が糸が解けたようにバラバラ、葉に光沢あり）、少し遠くにリョウブ（花満開）、登山道入り口までの比較的開けた草地に、メマツヨイグサ（黄色の花）、オトギリソウ（黄色の花、十字対生）、ノギラン（白い小さな花がブラシのように密生）、ヤマノイモ（垂れる雌花、立つ雄花）、アキノタムラソウ（紫色の花）など。

登山道入り口で、イソノキ（赤い実）、林内でハナイカダ（黒い実）、ヒヨドリバナ（白い花、十字対生）、サジガンクビソウ（さじ状のロゼットの葉、うつむいた花）など。天下辻までは林内をひたすら上る。木本植物では、タカノツメ、ツリバナ、コウヤボウキ、ミヤマガマズミなど。



キカラスウリ

ハナイカダ

クリ

3. 天下辻から鰻の手池まで

コース前半は薄暗い林の中の細い道。モトクロスバイクの轍による水たまりがあちこちにあり、そこにアメンボ、オタマジャクシが生活。目立った木本植物として、ガンピ（葉は互生、和紙の材料）、タカノツメ（小葉3枚）やタムシバ（葉は基部よりで幅広く、先端とがる）の幼木、サカキ（葉の縁、鋸歯なし）とヒサカキ（鋸歯あり）など。陽光差し込む小広場に、イソノキ（赤い実）、カスミザクラ（葉柄にも毛あり、葉の先端尖る）、クリ（イガあり）、ネズミサシ（球果あり）、ヤマウルシ、ミヤマガマズミ。

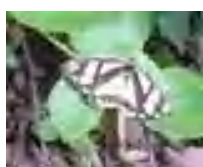
コース後半は車の走行可能な砂利道。左右の下草はミヤコザサ。ノギランやサジガンク

ビソウは、このコース全体に渡って見られた。主な木本植物は、ハネミノイヌエンジュ、リョウブ（花満開）、エゴノキ（緑色の実）、カマツカ（緑色の硬い実）、タンナサワフタギ（まだ昨年の枯葉を付けたものもあり）、ナツハゼ（実）など。展望台では、六甲山を北側から一望。

展望台から間もなく、クロマツ幼木が植栽されている広場。アカメガシワ、ヌルデ、ススキなど開けた土地に生える植物が目につく。広場の反対側に、リンゴの仲間のオオウラジロノキ。表六甲ではほとんど見ることはできないが、この辺りでは複数本自生している。幹にトゲがあるのが特徴。ケケンポナシはコクサギ型葉序。



オオウラジロノキ



キンモンガ



センニンソウ



キンミズヒキ

4. 鰻の手池から谷上駅まで

沢のせせらぎが聞こえる林内の舗装された道。しかし、午後はゴルフ帰りの車が通り、観察にはやや不向き。花や実をつけていた木本植物は、エノキ（実）、エゴノキ（実）、オニグルミ（実）、キブシ（実と来春咲く花芽）、クロモジ（実）、シラキ（実）、ノグルミ（実）、ハナイカダ（実）、ヤマボウシ（実）キガンピ（黄花、葉は対生）、クサギ（白花）、コマツナギ（赤紫花）。草本植物は、センニンソウ（白い花）、ウツボグサ（薄紫の花）、キンミズヒキ（黄色の花）、ホタルブクロ（白い花）、ミズヒキ（紅白の花）。ミズギボウシの花はこれからという感じ。

【主な解説】

1. サカキとヒサカキ

① 用途

サカキ：神事に用いられる植物。家庭では神棚。関東以西で多い。

ヒサカキ：墓、仏壇へのお供え。サカキが自生しない関東以北では玉串にも用いる。

② 国内生産量（平成19年）

サカキ：2,100万本

1位 和歌山 1,400万本、2位 鹿児島 200万本、3位 高知 160万本
ヒサカキ：千葉県が主産地だったとの記事があるが、国内生産量は不明。

③ 国内流通している90%以上は中国産

平成22年 サカキ：4.4億本、ヒサカキ：5.6億本の輸入。

2. エゴノキの虫こぶ (エゴノネコアシ) の不思議

① 誰の仕業？

- ・エゴノネコアシアブラムシ



② どこに虫こぶを作るの？

- ・冬越しした芽が3月下旬から4月上旬に萌芽。この芽は花芽と葉芽の2つからなる。
- ・花芽は1～7つの花と1～5枚の葉に展開。この葉には腋芽はつかない。
- ・葉芽は新梢として伸展。葉の基部に腋芽をつける。この腋芽は翌春まで発育しない。
- ・しかし、エゴノネコアシアブラムシが寄生すると、刺激を受けて伸展。虫こぶになる。

③ エゴノネコアシアブラムシの暮らしぶり？

- ・エゴノキで冬越しした卵が、エゴノキの萌芽に合わせて孵化。
- ・1齢幼虫が葉芽から進展した枝の腋芽の汁を吸う（花芽から進展した葉は腋芽なし）。
- ・この刺激で植物の細胞が異常に肥大して虫こぶをつくる。それと共に幼虫も成長。
- ・虫こぶの肥大と共に、虫こぶ内部はいくつかの房が形成される。
- ・虫こぶを作り始めたアブラムシが親になり、子供を産む。
- ・1つの房に1～3頭の幼虫が入り、やがて房の入り口は房の肥大と共に閉じられる。
- ・閉じ込められた幼虫が親になり、この親がまた子供を産んで房の中で繁殖。
- ・7月上旬くらいまでに、房内の子供たちは親になり、羽を持ったアブラムシとなる。
- ・羽をもったアブラムシが房に穴をあけ、エゴノキからアシボソやチヂミザサに移住。
- ・秋まで、アシボソやチヂミザサで無性的に世代を繰り返す。
- ・秋に、アシボソやチヂミザサで、エゴノキに戻るため羽を持ったアブラムシが現れる。
- ・このアブラムシがエゴノキに戻って、雄と卵を産む雌を生む。
- ・これらが交尾して卵を産む。このまま越冬。

④ 虫こぶを作っている途中でアブラムシが死んでしまったら、虫こぶはどうなる？

- ・虫こぶにはならず、奇形または八重の花が咲く（遅れ花）。
- ・アブラムシが汁を吸うことで、花を作る遺伝子発現を誘導か？

【後記】

天気にも恵まれた観察会になった。林内の小路と時折吹いてくる風が、暑さの割にはさわやかな感じを与えてくれた。前半の濃密な観察により、後半の時間に影響を与え、終了予定時間を少々過ぎてしまったことは反省すべき点である。